

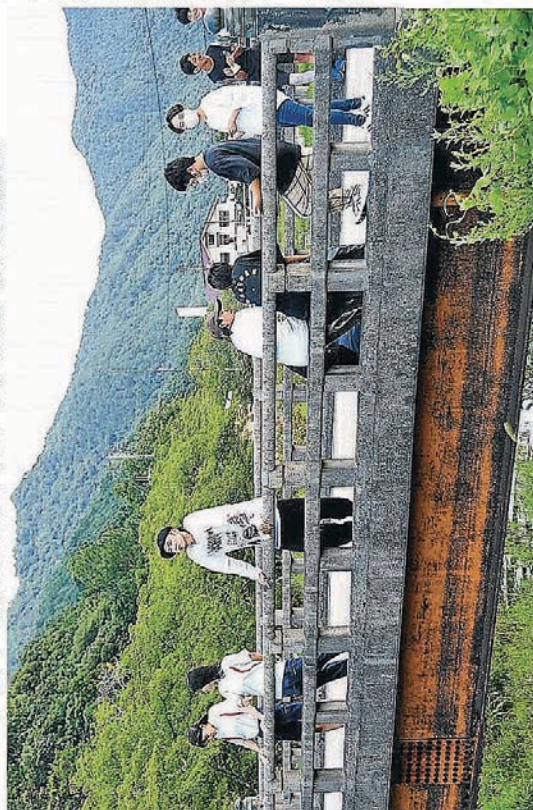
校歌作詞 (ライブ・ワークショップ)



多可

吉田さんは多可町で生まれ育ち、スガバント「ドーベルマン」のボーカルとして活動。奈良県生駒市で子ども食堂の運営に取り組み、不登校児の居場所づくりに関わったり、教育分野でも精力的に活動している。現在の3校を統合し、新たに誕生する「多可中学校」は起工

吉田タカシさん(左から3人目)と恵まれた自然に目を向け、アイデアを膨らませる中学生＝いずれも多可町中区録治屋



オリジナルの言葉で表現の可能性を考える中学生

地域を巡って 心象を言葉に

地元出身の吉田タカシさん校歌歌詞へ

多可町で2026年度の開校を目指す新中学校の校歌を同町出身のミュージシャン吉田タカシさん(41)が作詞することになり、現役の中学生から歌詞づくりのヒントを尋ねるワークショップを開いた。教育者としての顔も持つ吉田さんは「自分自身の感覚や思考に目を向けたい」と訴え、歌詞を探してまわらの中。生徒は正解のない問いに向き合い、等身大の言葉を生み出した。(伊田雄馬)

中学生15人と 歌詞づくりヒント探る

イブを観望。吉田さんのワークショップは同日18時～19時の2日間、中区録治屋のカフェを貸し切って開かれた。

初日の3日、吉田さんは物事に正しい答えが存在するという「正解信仰」を捨てるよう生徒に訴えかけた。「僕と一緒に心の中を旅する時間。点数も成績もつけないかもしれません」。自分の感覚を掘り下げ、頭の中の思考を客観的に手にとりこむよう求めた。

「誰も使ったことがない、オリジナルのオノマトペ(擬態語・擬声語)をつくる」という提案に従い、1回はカフェを出てまわらの中。遠くの山並みを見て、「あの山、アロアロしてるね」と口にした女子生徒に対し、「いいね、アロしてるね」と返す吉田さん。川を渡る涼しい風や、水田に伸びる青々とした稲など、汗をぬぐいながら自然を観察した。

カフェでは全員が作品を発表。初日のワークショップを終えた吉田さんは、「現役の中学生に会い、実際に考えていることを知りたかった。一緒に過ごした時間の中から歌詞が生まれればいい」と手ぬえを感じていた。

2日目にも中学生が参加し、現在の3校の校歌を分析するなどした。新たな校歌は中学生の意見を参考に吉田さんが歌詞を考え、町出身のイラスト、尾崎克典さんが曲を付ける。本年度中の完成を目指すという。



■写真

○1日目(令和6年7月31日)



○2日目（令和6年8月1日）

